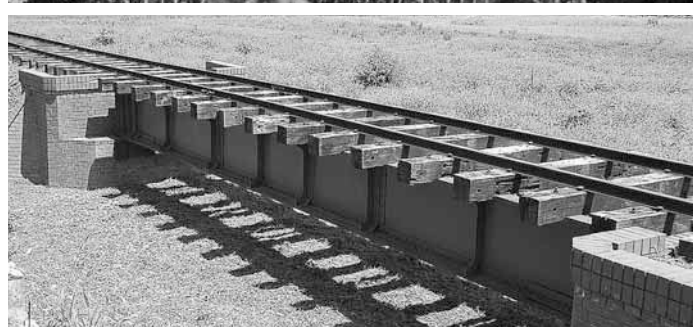




# 深谷と戦争

遺構・体験者から記憶をたどる



写真上：深谷製造所の建物と煙突（出典：目でみる埼玉百年）  
写真下：旧日本煉瓦製造(株)専用線（福川鉄橋）

## 東京第二陸軍造兵廠深谷製造所

本部は現在の深谷第一高校に置かれ、原郷・明戸・櫛引に工場がありました。

- 総敷地面積 21万坪 ●建坪 2万1,000坪
- 主要機械 480台 ●従業員数 2,375人
- 月産能力（無煙火薬）115t

深谷製造所の労働力構成

種別	人数
職員	100人
一般男子工員	859人
一般女子工員	452人
徴用工	214人
動員学生	750人
合計	2,375人

深谷製造所の生産設備

設備名称	月産能力	形式
綿薬製造装置	250t	旋回式およびトムソン式
ニトログリセリン製造装置	70t	ナサン式
無煙薬製造装置	115t	溶剤式、圧延圧伸式

出典：日本煉瓦100年史

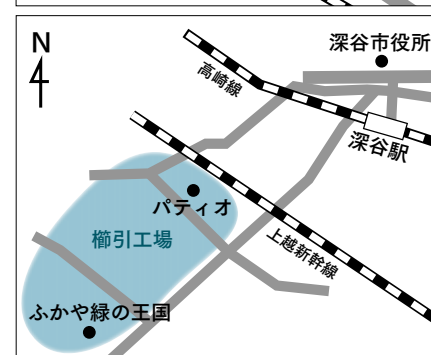
市内に現存する「戦争の遺構」をご存じですか。代表的なものとしては、原郷地内の「旧東京第二陸軍造兵廠深谷製造所」があります。今月号の特集では、東京第二陸軍造兵廠深谷製造所とその施設で作業に当たっていた体験者から、戦時下の深谷の記憶をたどります。今ある平和について、一緒に見詰め直してみませんか。

## 深谷に残る戦争の痕跡

第2次世界大戦末期、深刻な労働不足を補うため、中等学校以上の生徒や学生が軍需産業に動員されるようになりました。昭和19年には、学生・生徒全員の工場配置が閣議決定されました。こうした中、兵器工場である

「造兵廠」の製造所が各地に置かれ、県内では大宮、川越のほか深谷に造られました。既存工場への動員ではなく、工場の建設から地元の子供が携わった東京第二陸軍造兵廠深谷製造所の数奇な運命をたどっていきます。

東京第二陸軍造兵廠深谷製造所位置図（証言を基に作製）



## 戦局の悪化により軍需工場が深谷に

各地にあった造兵廠「東京第一・東京第二・相模・名古屋・大阪・小倉など」は、それぞれ生産兵器に区分され、東京第二陸軍造兵廠は火薬類を製造する専門廠でした。

昭和18年夏、戦局の悪化と本土空襲に伴い、兵器の増産と疎開の両面の意味合いから、東京第二陸軍造兵廠板橋製造所の疎開先として目を付けられたのが日本煉瓦製造(株)上敷免工場でした。ここは東京第一陸軍造兵廠岩鼻製造所（高崎市）に近く、小山川の水利もあり、何よりも深谷駅まで専用線が敷設されていたことが重要視されました。同年秋、非公式に同廠所属の技術将校の姿が工場で頻りに目撃されるようになりました。

11月になり、突然、明戸村役場に関係地主が集められ、県道由良深谷線東側（現浄化センター）一帯を強制買収し、板橋製造所を移転すると告げられました。県道西側も買収の意欲を見せていました。適当な移転先もなく煉瓦の製造が

中止されては困ることから、東側だけの買収となりました。また、専用線も買収されましたが、これも煉瓦の輸送に支障を来してしまふことから、軍との共用ということになりました。さらに、専用線沿線の幡羅村にも工場用地が買収され深谷工場となり、日本煉瓦敷地の明戸工場とともに東京第二陸軍造兵廠深谷製造所として用地が確保されました。深谷駅南の櫛引にも軍用地があり、同時に深谷製造所櫛引工場として整備されることになりました。

各工場の建設は急ピッチで進められ、深谷商業学校・深谷高等女学校などの動員学生や、徴用工などで昼夜を問わず工事が行われました。こうして用地買収から1年後の昭和19年10月に東京第二陸軍造兵廠深谷製造所が設立。本部は幡羅村原郷の深谷商業隣地（現深谷第一高校）に設置されました。このように、多くの労を経て造られた深谷製造所も結果的には、終戦まで10か月間のみ工場となりました。

\*徴用工：太平洋戦争中、国民徴用令の発動により、従前の職を離れて、国家の指定する軍需工場などの業務に従事した工具

## 体験者が当時を語る

東京第二陸軍造兵廠深谷製造所で作業に当たっていたかたから、当時の貴重なお話を聞くことができました。風化しつつある戦争の記憶を今に留め、平和な生活がいつまでも続くよう、自分たちに何ができるのか考えてみませんか。

### 火薬の製造、爆発と隣り合わせの日々

吉田輝義さん・ミチ子さん（本住町）

昭和17年、わたしが深谷商業学校3年（14歳）、昭和18年、妻が深谷高等女学校3年（14歳）の時に勤労奉仕が始まりました。朝、学校で点呼を取った後、学生たちは持ち場に分かれ作業をしました。わたしは土木作業に当たりました。4年生になると学校には行かず、直接深谷工場に行くようになりました。



深谷工場作業  
吉田輝義さん(84歳)



深谷工場作業  
吉田ミチ子さん(83歳)

深谷工場では、管状や方形の火薬を造っていました。わたしが担当していたのは方形の火薬で、主に小銃に使用されるものでした。作業場のそばにヨブ塔「溶剤分溜塔（2ページ写真）」と呼ばれる塔がありました。ヨブ塔は、火薬を造る過程で使用する液体を再度分離して、再利用するための施設で

あつたようです。

工場では工員と同様、日給も支給されていましたが、学校が管理していたため詳細は分かりません。男子学生は朝8時〜大体夕方6時くらいと夕方6時〜翌朝8時の2交代制、女子は日勤制となっていました。日勤時は、午前と午後10分程度、お昼は1時間程度休憩できました。昼食は、丼サイズの麦飯にキュウリを刻んだものが交ぜてあったり、ジャガイモの炊き込みの時もありました。それにみそ汁か漬物が付きます。食べるのが唯一の幸せでした。妻はお昼休みに女子同士で流行の軍歌を歌うのが楽しみだったようです。

昭和20年になると、空襲警報が毎日のように鳴りました。夜間に警報が鳴ったら、工場に駆け付け

ることになっていました。火薬に火が付いてもすぐに消火できる体制を取っておく必要があったからです。火薬がある建物の床に横になりながら、警報が解除されるのを待つ。そんな日々でした。終戦間際、太田市で空襲があり、妻は赤く染まった空の光景に一番恐怖を感じたそうです。8月15日の朝、突然、お昼に玉音放送があると伝えられました。放送内容を理解することはできませんでしたが、周囲の様子から、たまたまではないことを感じました。妻たち女子学生は、先生から「日本が負けた」と聞いて、泣き出しました。今思うと教育の力は恐ろしい。「日本は勝つ、玉砕もやむなし」と洗脳されるわけです。現代では考えられない時代でした。

### 戦時中の生活を鮮明に語る「学生日誌」

持田秀之さん（上野台）

わたしが深谷商業学校に入った昭和16年に太平洋戦争が始まり、卒業した昭和20年に戦争が終わりました。深谷商業学校では、指導の一環で全員に日記をつけるよう

教育していただきました。戦時中の約4年半を記した6冊の日記の中で、特に記憶に残っている出来事が幾つかあります。昭和16年12月8日の日・米英開

戦のことや、昭和17年2月18日のシンガポール陥落を祝し旗行列をしたこと、4年生に進級するころには同級生のうち予科練（海軍飛行予科練習生）や陸軍特別幹部候補生に志願した者が学年生徒の3分の1に達し、学級も編成替えを余儀なくされたこと、昭和20年4月4日の中島飛行機工場（太田市）が照明弾に照らされ、雨のなか降る爆弾が引き起こす爆発音・地響きで恐怖の夜を過ごしたこと、昭和20年5月21日の明戸工場で起きた火災のこと、そして昭和20年8月15日の正午に本社工場に集合して玉音放送を聞いたことです。

わたしはずっと、戦時中の学生生活は全くもって無駄な時を過ごしていたと思っていました。しかし、わたしはこの無駄な時を記した日記を公開し、読まれることで、次代の人には二度とあの無残な日々を繰り返してほしくないと願っています。現在、当然とされている平和は、多くの人たちの生命の犠牲によって成り立っています。このことを今を生きる若い人たちに伝えていければと感じています。



深谷・明戸工場作業 持田秀之さん(83歳)

12歳で書き始めた当時の日記（昭和16～20年・約4年半分）には、戦況をはじめ、戦時下の生活や学校生活、軍需工場での勤労奉仕、祭り、災害、天体など、事細かに記されています。

## ヒロシマ 原爆展 ナガサキ

戦後67年が経過し、日本では「平和」が当たり前となっています。忘れてはいけない「平和や命の尊さ」というものを、この原爆展を通じて見詰め直してみませんか。

- とき 7月15日(日)～21日(土)午前10時～午後7時30分
- ところ 旧七ツ梅酒造跡東蔵ホール（深谷町9 - 12）
- 内容

①広島平和記念資料館から取り寄せた貴重な資料・映像を公開します。また、開催期間中、会場隣の深谷シネマで上映する映画「この空の花 長岡花火物語」のロケ写真など関連展示も行います。

※映画「この空の花 長岡花火物語」は、平和への祈りを描いた大林宣彦監督作品です。上映スケジュールは7ページをご覧ください。

②15日午後4時30分～5時30分には、大林監督のトーク（500円・深谷シネマ主催・☎551 - 4592）を行います。

- 問い合わせ 秘書課（☎574 - 6631）

